

## 「不思議の国」の全人代



河津 啓介

3月に中国の国会にあたる全国人民代表大会（全人代）が1週間にわたって北京で開かれた。新型コロナウイルス禍の影響

で過去4年間は厳しい取材制限が課せられていたが、ようやく今年から、記者パスさえあれば事前の隔離や検査なしで全体会議や閣僚記者会見に入ることができる従来の姿に戻った。

ただ、首をかしげる対応にも出くわした。開幕数日前に記者パスを受け取る際に限って、PCR検査を求められたことだ。一度きりの検査では会期中の感染対策には意味がないと感じた。記者にとって面倒なのは言うまでもなく、担当職員の作業もそれだけ煩雑になる。検査要員や資材などのコストもばかにならないはずだ。担当者に理由を聞くと、「そういう指示になっている」という木で鼻をくくったような回答が返ってくるだけだった。

思いがけず中国の行政機構にはびこる「事なかれ主義」を身をもって経験した。

習近平国家主席を頂点とする強力なトップダウン

体制の副作用か、共産党や政府の内部で上の顔色をうかがう空気がまん延し、保身に走る役人が多くなっている。その結果、行政サービスが硬直化するなどの事態を招き、国民の間で「役人は民衆の不満は気にせず、お偉いさんの評価ばかりを気にする」との不満が募っている。

習氏自ら「官僚主義・形式主義の是正」の号令をかけたその全人代の足元で、記者パスの一件のような形式主義の典型事例が起きるのだから、言行の不一致もはなはだしい。それだけ政治体制に深く根付いた課題ということだろう。

「言っている内容と、実際の行動がなぜこうも違うのか」。その疑問は別の場面でも感じた。

全人代で読み上げられた政府活動報告では「政策の説明に正しく取り組み、透明性のある予測可能な政策環境を作る」と明言された。ところが、習指導部は長年恒例だった首相の記者会見を突然に廃止して世間を驚かせた。最高指導部メンバーに国内外の記者が直接質問できる貴重な機会を奪いながら、「透明性」を語る姿勢は正直、理解に苦しむ。

すべてがあべこべの「不思議の国」に迷い込んだような気持ちにさせられた今年の全人代だった。